

自らの具体的行動でスバラシイ二十一世紀を創り上げよう。



高井法博会計事務所 平成十三年度スローガンより

高井法博会計事務所 代表 TACCTグループ 代表 税理士 高井 法博

二十一世紀を迎えた。世界経済の歴史的な転換期にあって、大きな構造的な変化を我々は強いられており、新たな具体的戦略的対応を早急に立案し実行に移さねばならない。

事業には栄枯盛衰がある。特に現在のビジネス社会は嵐の中で大海に乗り出す帆船のようなものである。限らない障害、リスクの中で仕事をするということは、どこに何をどうしたら良いのか、と言う問いばかりで、羅針盤もなく航海に出るようなもので、星の見えない夜などは大変な恐怖が襲ってくる。

野村証券常務からベンチャーキャピタリストとして全く新しい分野へ踏み出され日本合同ファイナンス・日本アジア投資社長を歴任し大成をされた今原禎治氏は、ある日、ボストンで町を歩いていた時、画廊で荒海に乗り出す帆船の絵を見つけた。早速その絵を買

い求め、以来十数年いつも自分の部屋に飾り、自分自身が悩み苦しみ考え抜く時、きまっていたこの絵を見ては先駆者の苦勞をしのいでいると言われる。とにかく一度しかない人生、節

を無視した経営がなされている。企業や組織は、顧客や市場に価値を提供するのが存在理由のはずである。自由主義経済社会においては、『お客様のお役に立てるかどうか』『お客様が必要とするかどうか』が唯一の存在し続ける条件となる。であるならば、我々に今求められるのは、すべての企業活動の視点をお客様に置くことである。

二、「凡事徹底」の体得。

この言葉は、かつてTACCTの総会で講演をしていたロイヤル(現・イエローハット)の鍵山秀三郎前社長からお聞きした言葉である。それはどんな小さなことでも大切に行い、わず

かばかりの微差を追求していく生き方である。少しの期間では目に見えないが、長い期間を経ると、積み上げた微差の追求により得た成果は、後からまねようとしても一朝一夕にはできない。成功者は常識的な当り前のことや地味で根気のいること、いわば『小さいこと』

の積み重ねを毎日続けられた人だと思ふ。ベストセラー『勝ちぐせをつける生き方』の中で、染谷和巳氏は次の二十例を上げている。

- ①毎日、早起き(六時前)している。
- ②悩みがある時でも他人に暗い顔を見せない。
- ③いつも早足で歩いている。
- ④報告書は原則として一枚簡潔を旨としている。
- ⑤「忙しい」と言い訳をしたことがない。
- ⑥人と会うのを億劫がらない。
- ⑦「できない」「無理だ」と言わない。
- ⑧十年後の目標のための計画を立てている。
- ⑨今日で

三、大変革のスピードを持った実行。

経営者は『決断』と『実行』をする人である。できる限り沢山の情報と衆知を集めスピードを持って実行する必要がある。あの松下幸之助氏や稲盛和夫氏でも成功率は三十%であると言われる。

まず実行し誤っていたらすぐ修正し会社をより良い方向に勇気を持って導き、スバラシイ二十一世紀を我々の手と足と頭で勝ちとって行くではありませんか!!。

